

第3章 まとめ

3-1 太田市南部条里地割り及び高林古墳群との関係について

坂井 隆

今回の調査では、8世紀から10世紀の遺構を検出すると共に、微少ながら古墳時代前期の遺物を発見した。八瀬川と石田川の合流点に位置する本調査地での発見は、古墳時代後期及び9世紀を中心とする竪穴住居群を検出した太田市教育委員会による高林梁場遺跡の調査成果を併せれば、興味深い事実が考えられる。すなわち、北方に広がる太田南部条里地割り・北西側に展開する高林古墳群との関係であり、さらにそれらと深い関わりのある八瀬川が存在である。

3-1-1 条里と東矢島廃寺

本調査で確認した竪穴住居は8世紀代の僅か3軒であり、他には10世紀の土坑と時期不明のピット群である。単純な数量としては、決して多いとは言えない。しかし狭小な調査面積、そして安定した台地部がさらにその半分程度でしかないことを見るなら、数量以上の意味があることに気付く。まして3軒の竪穴住居は重複か近接しており、同時存在がありえないことを考えれば、相当な遺構集中であると理解できる。

本遺跡全体での古代集落の範囲は、高林梁場遺跡の調査で検出された濃密な竪穴住居の重複状況を含めて検討すると、少なくとも高林梁場遺跡調査地区北側の八瀬川屈曲部分から本調査地までの南北約400mの広がりがあると考えられる。東西の幅は、東が八瀬川を限界とする可能性があり、西側は希薄になる傾向がある。そのため、高林梁場遺跡での検出範囲である約100m程度と考えられるので、3～4万㎡程度の広がりが見込める。その中では地域的な濃密はあるだろうが、8世紀から10世紀の間での極めて大規模な集落遺跡である可能性が高い。

この時代の周辺の遺跡では、まず八瀬川の対岸北北東方向には緑釉陶器が出土した高林向野遺跡があ

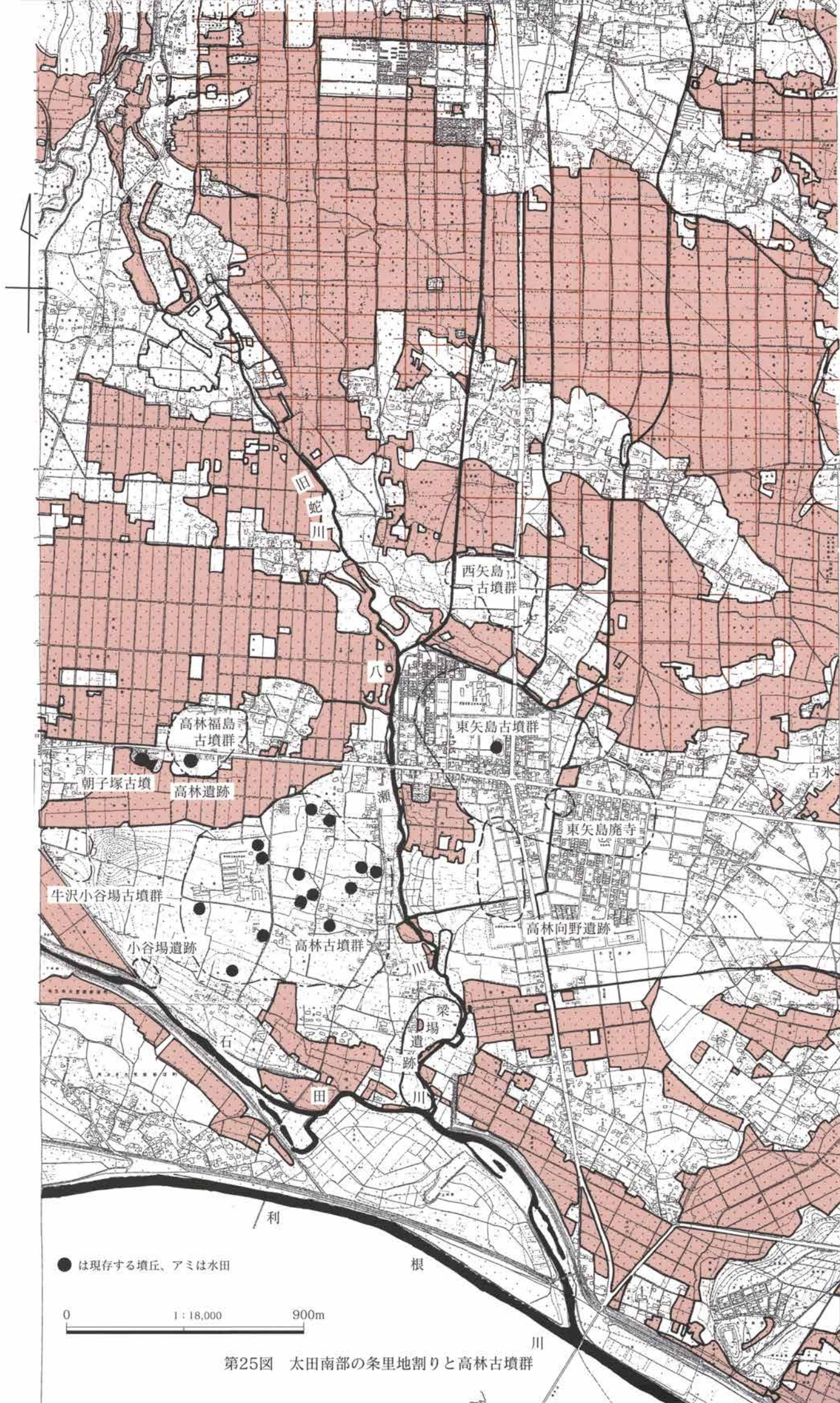
り、さらに東矢島廃寺(東矢島遺跡と同じだが、第25図では『太田市史通史編原始古代』の位置とした)がある。後者は文字瓦が出土しており、8・9世紀の寺院跡もしくは官衙跡と考えられている。八瀬川右岸で西に1km離れた小谷場遺跡でも、9世紀の住居址が発見されたと言う。

一方、高林台地以外では、古代のそのような遺跡は確認されていない。しかし台地北側の沖積地では、大規模な条里制地割りが残っていた。1960年代に作成された現存する最も古い都市計画図に見られる方格地割りを、第25図に示した。現在の国道407号線の旧道にほぼ重なる南北の走向が見える。またここには示さなかったが、旧蛇川の南西側でも同一の方格地割りが続いていたことが、戦後の米軍撮影写真に残っていると言う。

残念ながら、この条里地割りについては、発掘調査によって具体的な内容や時期が明らかになっていくわけではない。ただ東矢島廃寺に当たる南北線を北に延ばすと太田市街地の北に接する金山山頂に達している。この金山山頂と東矢島廃寺を結ぶ線を基準として方格地割りが設定された可能性は高く、古代条里制地割りでの一般的な測量方法と見ることができる。

第25図に示した範囲で興味深いのは、八瀬川が旧蛇川との合流点までは、ほぼ南北地割りに沿っていること、そして東側で南北地割りとほとんど重なっている2本の水路が八瀬川に合流していることである。合流点以南では高林台地を縦断している八瀬川だが、北の沖積地では条里地割りの南北線の複数の流れを集めているのである。すでに指摘されているように、この地域の八瀬川は少なくとも、条里水田の幹線排水路としての機能をもって造られた人工の川であることは、間違いなさだろう。

米軍写真に残るこの地割りの範囲は、金山を頂点



第25図 太田南部の条里地割りと高林古墳群

3 まとめ

とし概ね国道354号線に沿って太田市西端の下田島から大泉町の古氷^{ふるこおり}までの約6kmを底辺とする三角形に広がっている。古氷は東矢島廃寺の東1kmに接しており、^{おうら}邑楽郡衙の残存地名とも考えられている。

この古氷地名と直接結びつく古代遺跡はまだ知られていないが、隣接する東矢島廃寺は上述のようにこの地域の条里地割り設定と深い関係があった重要な施設であった可能性は高い。そのような東矢島廃寺に近接すると共に、条里水田の幹線排水路である八瀬川と石田川の合流点に位置する本遺跡の古代集落が、この地域の拠点的な居住域であったことは間違いないだろう。高林梁場遺跡で緑釉陶器が出土したことも、それを裏付ける。ただし、地形的には高林台地は東の大泉台地の延長であり、西の蛇川まで地形的な同一性がある。そのため須田茂も指摘しているように、古代には新田郡ではなく邑楽郡に属していたと考える方が自然と考えられる。

なお和名抄に記載された新田郡の郷名の中で、石西郷を太田南部条里遺存地域と高林台地を包括して比定する考えがある。その是非はここでは論じないが、和名抄の記録はあくまで10世紀前半のものであり、8世紀には邑楽郡の別の郷であったとしても何らおかしくはない。

また771(宝亀2)年まで武蔵国は東山道諸国に含まれていたため、新田駅から武蔵国府に向かう東山道武蔵路が存在していた。新田駅は大間々扇状地末端東部の現在の太田市西北部と新田町北東部境界付近に存在した可能性が高いため、そこから武蔵国府へ向かう最短ルートを考えて、高林台地周辺を利根川渡河の重要な地点とする説がある。

本遺跡周辺の上述のような状況を見れば、その蓋然性は高いと言えるが、また路面そのものの検出はない。ただし東矢島廃寺の文字瓦には「吉井」などがあり、40kmほど西方の吉井窯跡群で生産された可能性もあり、その場合は広域の流通拠点と見ることができる。

3-1-2 古墳時代の遺物と八瀬川

古墳時代の遺物は前期の土器片が僅か4片出土しただけで、遺構は全く確認できなかった。

高林梁場遺跡では古墳時代後期の竪穴住居が14軒検出されているが、それは調査地の北側に集中していたとのことであり、本遺跡全体での古墳時代後期の集落は北端部分が中心であったと考えられる。

周辺での古墳時代のあり方を見ると、同じ八瀬川右岸の北西側には、高林古墳群が展開している。さらにそこから狭い低地を挟んだ北西側には前期の大前方後円墳である朝子塚^{ちようしづか}古墳と同時期の集落である高林遺跡及び高林福島古墳群がある。また高林台地西端には牛沢小谷場古墳群が見られる。一方、八瀬川左岸では後に東矢島廃寺が造営されるあたりを中心に、東矢島古墳群が展開していた。そして狭い低地を挟んだその北にはやや狭い西矢島古墳群もあった。

各古墳群の内容は、『太田市史』によれば、次の通りである。

牛沢小谷場古墳群は、17基の小円墳で構成され、大部分は後期と推定される。だが5世紀もしくはそれ以前のものも含まれていた可能性が考えられている。

高林福島古墳群は、横穴式石室を持つ4基の小円墳で構成される。7世紀後半と考えられている。

高林古墳群は、南西側の高林不動古墳群と北東側の高林西原・弦巻古墳群に分けられることもあるが、約80基が存在していた。その端緒をなすのが5世紀後半から6世紀前半に形成された7基の帆立貝形古墳で、全長40～70mの規模を測る。その後6世紀中頃から横穴式石室の小円墳が次々に築造されていったとされている。

東矢島古墳群は、旧九合村第60号墳(全長111m)など6基の前方後円墳(100m級5基、50m級1基)を中心に形成されていた。これらの前方後円墳は横穴式石室を持つと共に、主軸を台地の走向である西北西・東南東方向にそろえていた。いずれも、6世紀中頃から後半に形成されたとされている。また周

辺には11基の小円墳があり、そのうちの道風山古墳は、7世紀中葉の方墳である可能性も考えられている。

西矢島古墳群は、50m級の前方後円墳1基を含む22基で構成され、ほとんどは小円墳である。時期的には東矢島古墳群と同時期とされる。

高林遺跡は、高林福島古墳群の中に位置する前期の集落遺跡で、石田川式期の2軒の竪穴住居が発見されている。近接する前期の大前方後円墳である朝子塚の墳丘からも、石田川期の土器片が発見されている。だが集落と朝子塚の間に時間差があるのかは、不明である。

以上のような状況をまとめると、まず前期には高林台地から北西に少し離れた微高地上に、朝子塚古墳や高林遺跡が形成された。そして中期には帆立貝形古墳が集中する高林古墳群が大きな墓域になる。後期になると、その前半に首長墓クラスの大前方後円墳が次々に築造されて、東矢島古墳群として成立する。さらにその頃から後半にかけて爆発的に各古墳群で小円墳が次々と造られることになった。なお東矢島古墳群の中には、前述のように終末期に近い方墳の可能性のあるものもあり、その場合は同位置に存在する東矢島廃寺との時間的な間隙は小さいことになる。

このような周辺状況を見るなら、本遺跡北側での後期の集落は、基本的にこの時期に爆発した小円墳群、特に高林古墳群の中に見られるものと直接関係があると考えるのが自然であろう。また本遺跡で発見した前期の土器片と同時期の遺跡は、最も近いのが高林遺跡になるが、距離的にそこから流れて来たとは考えにくい。本遺跡内にも前期の集落があった可能性が推定できる。

もしそうならば、本遺跡は古墳時代前期と後期の居住域になる。ところが高林古墳群のあり方を見るなら、上述のように中期の帆立貝形古墳群の築造から始まっている。そのため中期の集落も本遺跡に存在したとしても不思議ではない。

いずれにしても本遺跡は、高林古墳群と密接な関

係のあった居住域であることは確かである。

さてここで考えねばならないのは、八瀬川の性格である。すでに上述のように、条里のラインに沿って南流し、高林台地を縦断する八瀬川は、古代の幹線排水路であった可能性は高い。

この八瀬川の形成について、『太田市史』では周辺の古墳群との関係から、次のように推定している。

高林台地を縦断する部分は、旧蛇川の流れを変流した人工的な流れである。そしてこの部分を境にして高林古墳群と東矢島古墳群にそれぞれ対岸への連続性がないことから、台地縦断部分の八瀬川は高林古墳群の形成時期である5世紀には造られたと推定できる。そのような部分に古代になって条里排水路が合流されたことになる。

この考えについて、現状ではまだ当否を確定するだけの資料はない。高林台地を縦断する八瀬川の対岸には古墳時代の古墳群や遺跡が本当に続かないかは、不明である。古墳群については昭和初期の段階で墳丘が残っていたものに限れば、そのような非連続性が見られるが、すでに破壊されていたものが対岸に存在していた可能性は完全には否定しきれない。同様に本遺跡の古墳時代集落が続いていなかったかどうかについても、明確な決めてには欠けている。

なお、北側で八瀬川は西矢島古墳群を縦断している。少なくともこの部分は条里ラインに沿った排水路であることは確かであり、この古墳群を縦断することに不自然はない。

参考文献

『市内遺跡X』、太田市教育委員会、1994

『太田市史 通史編 原始古代』、太田市、1996